【訳注】

ルイス・キャロルのロシア旅行日記　前半
1867年7月12日―8月1日

笠　井　勝　子

Lewis Carroll's Russian Journal-1
An Annotated Japanese Translation with Introduction

KASAI, Katsuko

要旨：ルイス・キャロルは『不思議の国のアリス』を出版して1年半後の1867年にロシアへ旅行をした。その時の旅行日記を翻訳し、また現在と当時の生活や習慣の違いなどによって説明が必要と思われる事項にはできるだけ注を付し注釈付き翻訳とした。翻訳に先立つ序のなかでは、旅行をすることになった経緯と、一緒に旅をしたヘンリー・パリー・リドゥンとキャロルとの関係、またリドゥンの宗教上の立場などについて解説した。この旅行日記ではその頃の英国の大学人が初めて外国を訪れて出会った驚きがユーモアを交えて語られていて、キャロルが普段つけていた日記とはちがい読み手を想定していることが窺える。事実キャロルの死後に他の日記は親族の手を経て大英図書館に入ったが、旅行日記はそれとは別に米国へ渡り、単独であるいは他の作品と一緒に全集の中に印刷されてきた。

　ロシア語を知らなかったキャロルはロシア語の僅かな単語だけで話を通じさせようとしている。キャロルがメモしたロシア語の一部には彼の勘違いもあると指摘を受けたので注に記しておいた。

キーワード：Lewis Carroll, Journal, Russia, 1867, H. P. Liddon

1．序

ルイス・キャロル[1)]は1867年7月12日から9月13日までのちょうど2ヶ

1）Lewis Carrollは筆名で、本名はCharles Lutwidge Dodgson（1832 - 1898）.

月間、オクスフォード大学のクライスト・チャーチ学寮の先輩であるヘンリ・パリー・リドゥン[2]と一緒にロシアへ旅行をしました。キャロルは数学が専門の分野ですが、1年半前の1865年に『不思議の国のアリス』を出版しています。リドゥンの方は神学者で福音派の熱心なプロテスタントの家庭に育ち、伝記によれば子どもの頃からタイムズの新聞紙で聖職者の着るガウンを作って説教の真似をしていたということです。大学ではカトリックやギリシャ正教に対して寛大な宗教観を持つジョン・キーブル[3]に傾倒し、特に東方教会との統一を考えていました。このロシア旅行には東方のロシア教会と教会統一について意見を交換する非公式の使命もあったといわれています[4]。ちょうどロシア旅行の前年1866年に、リドゥンは一連の説教、バンプトン・レクチャー[5]をおこない、その説教集[6]の出版[7]によってヨーロッパ、ロシアにまでもリドゥンの名は伝わっていました。リドゥンのおこなう説教には多くの人々が話を聞こうと集まった、とキャロルの友人でもあるヘンリー・スコット・ホランド[8]が説教を聞く聴衆の感動を語っています[9]。キーブル没後（1866年）に大学が故人を記念する学寮を新しく設立することを決めた[10]ときには、オクスフォード運動[11]の旗手のひとりでキーブルと共にリドゥンの師であるE.B.ピュージー[12]が、リドゥンを初代学寮長に推薦しました。1年以上に亘る熱心な説得にもめげずリドゥンはその名誉を断り続けて、結局受けることをしませんでした。これは、ちょうどロシア旅行を挟んだ翌年のことでした。日常生活とキリスト教が深くかかわっていた時代に聖職者の肩書き（Reverend）を持ち、母国英国においては日曜日の午前と夕方の礼拝はほとんど欠かすことなく出ていたキャロルとリドゥンが、外国旅行の間にどこの教会で礼拝をしたのか、それぞれの考え方が反映されて興味深いものです。旅行の後半に二人の間で交わされた議論[13]は宗教観にあったようで、リドゥンに比べてどちらかといえばキャロルの方は自分の育った英国国教会の礼拝の仕方や簡素な装飾の教会に執着していたようです[14]。

旅行の年にキャロルは35才、リドゥン38才で、旅の前半にリドゥンは

2）Henry Parry Liddon（1829-90）. オクスフォード大学でキャロルと同じクライスト・チャーチ学寮出身のキリスト教説教者。
3）John Keble （1792-1866）。オクスフォード大学のコープス・クリステイ学寮で奨学金を受けて進学し、19才で優秀の証のダブル・ファーストを取り、オリエル学寮のフェローに選ばれる。後に詩学の教授となり宗教詩The Christian Year を出版し、生前に90回もの版が出た。オクスフォード運動の指導者の一人でニューマンはキーブルのことを運動の 'true and primary author'といった。1836年からウィンチェスターに近いハーズリーで牧師になる。1850年には、聖処女マリア教会の牧師。
4）*The Russian Journal —II*, pp. xii-xiii, Morton Cohen ed.
5）ソールズベリ大聖堂の参事ジョン・バンプトン（1690-1751）がオクスフォード大学に財産を遺贈し神学に関するレクチャー・サーモンを毎年8回行うことを遺言し、その名前がついた。学寮長だけで説教者を選ぶ、リドゥンの場合は勧められたのを躊躇して申し込みが遅れ、1票差でA.W.ハッダンに決まった。しかしハッダンは健康上の理由で辞退し、リドゥンになった。リドゥンの説教は19世紀のバンプトン・レクチャーで最高の説教と称えられた。
6）題は、Divinity of our Lord, and Saviour Jesus Christ.
7）通常バンプトン・レクチャーは30部印刷されてオクスフォード大学の総長、学寮長、そして市長に渡る。リドゥンの説教集の初版2500部は直ぐに売り切れ、1880年までに25,000部が売れた。その後改訂して毎年約800部出た。リドゥンは死の1ヶ月前には14版のまえがきを書いていた。
8）Henry Scott Holland（1847-1918）．クライスト・チャーチ学寮でキャロルの後輩。同学寮の上級研究生、講師。キャロルは1882年にホランドの推薦で教授社交室の主事に選任された。ホランドはリドゥンと同じセント・ポール大聖堂の参事となり、大学では神学の欽定講座教授を勤めた。
9）The mighty hush of expectation; and then the thrill of that vibrant voice, alive with all the passion of the hour, vehement, searching, appealing, pleading, ringing ever higher as the great argument lifted him....
10）Keble College は募金によって建てられた。その設立の趣旨はキーブルを記念する目的と共に、社会の上層部の子弟に限られてきた大学教育を恵まれない優秀な学生に大学教育の機会を与え社会に貢献する人材を育てることが目的であった。
11）19世紀前半にオクスフォード大学で始まった宗教運動。
12）Edward Bouverie Pusey（1880-1882）．クライスト・チャーチ学寮ではキャロルの父と同輩.オリエル学寮でフェローとなり、キーブル、ニューマンと共にオクスフォード運動を推進。キャロルがクライスト・チャーチ学寮で優秀の標であるダブルファーストを取って特別研究生に選ばれたときには、キャロルの父に手紙を出して「君の息子の得た名誉は君に対する旧友のよしみによる依怙贔屓などでは絶対ない」と書いた（*The Life and Letters of Lewis Carroll*, p.53-4）。大学内の実力者の一人。
13）キャロルの日記には見えないが、リドゥンの日記にはargued「言い合った」とある。
14）ロシア旅行日記中の7月28日参照。

体調を崩したり、寝込んだりすることがありましたが、やがて長旅にも慣れ、ロシアへ行った年のちょうど2年前1865年に出版されたジョン・マレーによる詳しい旅行案内[15]を参考にして、目的地に着くや町のなかを見て歩き、教会、宮殿、博物館、美術館を、次々と見学しています。日記にはマレーの案内書の説明を確かめているような記述[16]もあります。

このロシア旅行は用意周到に時間をかけて準備した旅ではなかったことは、出かける前日7月11日のキャロルの日記に、「ロンドンからパスポートが届いた。数日来リドゥンが一緒に外国へ旅行に行けると言ってくれて、行き先をなんとロシアにした！」という記述があることからわかります。キャロルの日記は6月26日から7月11日に飛んでいて6月26日にはシェルドン講堂[17]でおこなわれた大学の学位授与式で、キャロルは長年の親しい友で学生監をしていたトマス・ヴィア・ベイン[18]に頼まれて式場に入る観客の整理を手伝いました。その夜はアイスキュロスのギリシャ悲劇を基にした芝居を見ています。したがってロシア行きの話は早くてもその翌日の6月27日以降に出たことになります。事実、*The Russian Journal — II* として編集・出版されているリドゥンの日記によれば[19]、7月4日、「ドジスン[20]に一緒にロシアへ行こうと提案した。彼はその話に乗り気になった」。この6日後7月10日のリドゥンの日記は、「ドジスンとロシアへ出かけるための最後の打ち合わせをした」。翌日の11日にキャロルは、「パスポートが届いた」と書いています。

リドゥンは夏になると外国で休暇を過ごしていた[21]ようです。一方、キャロルはまだ国外へ出たことがなく、パスポートの手続きも初めてのことでした。キャロルの旅券は現在、アメリカのフィラデルフィアにあるローゼンバック・ミュージアムが所蔵しています[22]。

大学で数学の講師をしていたキャロルは、シンプルで明快な説明を重んじるせいか、同じ時代のディケンズ[23]やジョージ・マクドナルド[24]と比べると、読んで分かりやすい文を書いています。その理由の一つはディケンズもマクドナルドもかれらの時代19世紀半ばのものを時代のことばで

時代の人々に向けて書いたということでしょう。一方キャロルは時代を超えたテーマを持っていたのではないかと考えます。それはおとなにもこどもにもわかることばで、人に喜びと幸せをもたらすことにあったのでしょう。キャロル自身はこのことを「『不思議の国のアリス』の読者へ」のなかに書いています[25)]。

ロシア旅行日記は1867年7月12日から9月13日までのちょうど2ヶ月に亘る記録で、キャロルが平常つけていた日記とはまったく異なる調子で書

15）*Handbook for Travellers in Russia, Poland, and Finlan*d. John Murray, 1865.

16）ロシア旅行日記中の7月31日参照。

17）Sheldonian Theatre. オクスフォード大学総長、カンタベリ大司教のGilbert Sheldonの寄付で大学の行事、儀式を行う建物として1669年に完成した。

18）Thomas Vere Bayne（1829-1908）．父親はキャロルが生まれたダーズベリに近い町でウォリントン・グラマー・スクールの校長をしていたことから、家族ぐるみの付き合いがあった。キャロルと同様に生涯独身で学寮に住んだ。キャロルの遺言書の証人の一人。端正な容姿から、クライスト・チャーチ学寮を具現している人物、とも言われた。

19）*The Russian Journal - II*, A Record kept by Henry Parry Liddon of a Tour taken with C. L. Dodgson in the Summer of 1867, Introduction, p. xiii, ed. by Morton N. Cohen

20）19世紀半ばの英国のgentlemenは親しい間で姓を呼び捨てした。

21）‘His customary summer holiday abroad', *The Russian Journal - II*, Introduction, p. xiii, ed. by Morton N. Cohen

22）今日のパスポートとは異なり写真はついていない、目の色、頭髪の色を記載している。パスポートに書かれている目の色はグレイとある。目の色については濃いブルーだったということをイーストボーンでキャロルの滞在先に一ヶ月泊ったイーザ・ボーマンが思い出の記*Lewis Carroll As I Knew Him*の中に書いている。イーザはロンドンでは芝居の子役として有名。

23）Charles Dickens（1812-70）．当時流行のディケンズの小説をキャロルも読んで、ディケンズの物語の連載が新聞に出ている間は、読者は他の書き物を見向きもしないだろうと日記に書いた。

24）George McDonald（1824-1905）児童文学作家。キャロルが『不思議の国のアリス』を出版することになるきっかけは、最初に書いた「地下の国のアリス」の手書き原稿をジョージ・マクドナルドの家族に読んでもらい、出版を強く勧められたことだった。

25）December 25, 1871の日付で、'the truest kind of happiness, the only kind that is really worth the having, the happiness of making others happy too!'. *The Works of Lewis Carroll*, p.223, 1965.

かれています。当時、大陸への旅は恵まれた階級の人々が教育の仕上げとして見聞を広めるためにでかけていました。オクスフォードの大学講師とはいえ、裕福な背景を持たないキャロルにとって、外国に行くということはなかなか機会のないことでした。そして1867年のロシア行きはキャロルにとって最初で最後の外国旅行になりました。好奇心が強いキャロルにとってこの旅行は特別なできごとだったと想像されます。見聞することを詳しく書き留めて、帰国すると家族や親しい人々に読ませようと考えた様子です。その筆は読むものに笑いを提供することを忘れず、また、他の書き物にはほとんど見られない叙情豊かな描写もあります。これはロシアからの帰途に見られるもので、遙かな国への旅が終ろうとして、母国の英国へ戻ることへの安堵から緊張が解け気持に余裕が出てきたことによるものでしょう。

以下はルイス・キャロルのロシア旅行日記のうち、前半を訳出し注釈を付けました。

典拠したテクストはプリンストン大学図書館モリッシュ・パリシュ・コレクションに所蔵されるキャロルの日記M.S.のマイクロフィルムです。手書きの日記帳は平常付けている日記と同じ種類のノートですが、他の日記の場合に表紙に自分で手書きして付けているPrivate Journalと通し番号[26]とはこの日記帳にはついていません。そのことからも、また初めに書いたようにユーモアが見えること、自分をさして 'the writer' と書いている箇所があることなどからも、他人に読ませる目的の旅行日記でした。旅行用には新しいものを用意して旅行に出発する7月12日から書き出しています。日記帳は罫線のない無地縦長の小形のノートでサイズは縦7.2インチ×横4.6インチ[27]、オクスフォードの文具店の貼ったシールが残っています[28]。頁が足りなくなり、8月15日の途中から2冊目に入っています。

この日記の印刷本は所有者となったモリッシュ・パリッシュが1928年に個人的に印刷させたものが最初で、*Tour in 1867*というタイトルでした[29]。なお、同行したリドゥンの日記 *The Russian Journal* ― *II*、また1935年出版

のマクダーマット編のルイス・キャロルの日記 The *Russian Journal*、そして1999年のE. ウェイクリング編*Lewis Carroll's Diaries* 第5巻を参照しました。

2．注釈付き翻訳　ルイス・キャロルのロシア旅行日記　前半
1867年7月12日―8月1日

7月12日（金）サルタン[30]と私はロンドンにほぼ同時刻に到着した。ただし別々の所で、こちらの到着地点はパディントン、あちらはチャリング・クロス[31]である。群集は後者の方が非常に多かったことは認めねばならぬ[32]。人が集まった第三の場所[33]はマンション・ハウス[34]で、ちょうどベルギーの志願兵[35]の接待が催されていて、6時頃にそこから英雄たちを

26）日記の通し番号はキャロルが表紙に手書きしたもので、最後の巻の表紙は、13、その下にJuly 1, 1892 to とあり、ノートがいっぱいになったら、最後の日付を入れることになっていた。最後の記録は1897年12月14日。亡くなる1ヶ月前。
27）18.5センチ×11.5センチ
28）Sold by W. Emberlin, Oxford. というシール。他の日記にも同じシールが残っている。
29）ここに掲載したキャロル自身の手による挿絵はイギリスのセルウィン・グッデーカー氏が所持する1928年版から提供を受けた。
30）アブドゥール・アジズ（1830-1876）。在位1861-76。サルタンは旧トルコ帝国主権者の称号。このとき国賓として英国を訪問。異教徒の最高指導者を国賓として迎えたことに関して、リドゥンはロシア訪問中にロシア正教の最高指導者に会うと批判を受けることになるが、彼は英国では政教分離であることを告げて理解を求める。
31）チャリング・クロスとパディントンは、ロンドンを発着する列車の起点駅で、前者はロンドンから南東へ向かう路線の発着点、後者はロンドンからオクスフォードを通って北上する路線の発着点。この他にロンドンのキングズ・クロス駅はケンブリッジの近くを通って北上する路線の発着点。サルタンはドーバーからロンドンのチャリング・クロス駅へ到着し、キャロルはドーバーへ向かうためにオクスフォードを出てロンドンのパディントン駅に到着した。
32）キャロルにはもちろん出迎えはない。取り澄ました笑いである。
33）第二の場所は自分が到着したパディントンという仄めかしがある。
34）Mansion Houseはロンドン市長の公邸。
35）戦闘のためといったものではなく将来の事態に備える市民の義勇兵で、この前年にはイギリスからベルギーを訪問、ここではそれに対するベルギーからの返礼訪問であった。1867年7月13日のThe Times はベルギー志願兵のロンドン到着時にイギリス人の熱烈な歓迎ぶりを報告している。

乗せたオムニバス[36]の行列が東へ向かって動き始めた。このために私が買い物をするのに非常に時間がかかった。チャリング・クロスからドーバー行きの列車に乗ったのは8時半になった。宿のロード・ウォールデンに着くと、いっしょに旅をするリドゥンはすでにそこにきていた。

7月13日（土）前の晩に決めておいたとおり朝8時に食事をした。というよりもその時刻に食卓に着いてパンにバタをつけて齧りながら骨付き肉[37]が出てくるのを待った。こうして30分も経つとちょっとしたことになった。初めは、あたりをうろうろしているウェイターに、まだか、と情けない哀願をした。すると、「ただ今参ります」と宥める口調で言うのだ。しばらく経って、今度は厳しい語調で、まだかと催促した。すると、プライドを傷つけられたように、「ただ今参ります」を繰り返す。これを繰り返すうちに、ウェイターはみなその巣穴へ引っ込んで壁際の食器入れの後ろや皿蓋[38]の下にもぐりこんでしまった[39]。それでも、骨付き肉は出てこなかった。およそウェイター[40]が見せてくれる美徳のなかでも退去の礼ほど望ましからざるはなしということでリドゥンと意見が一致した。そこで私は重大な議案を二つ出した。二つとも第一読会[41]で否決された。その一、このまま席を立って、骨付き肉の代金は支払わない。その二、店の経営者を探し出し、ウェイター全員について文句を言い立ててやる。これで大騒ぎは出るだろう、だが骨付き肉は出ないだろう。

こんなことがあったが、9時には乗船していた。列車の車両二両分の荷物が船の甲板に空けられて大ピラミッドのような見事な山ができあがっていた。その山に二人分の旅行鞄を提供できたのは誇らしい。穏やかな90分の船旅[42]だが、船客のなかには筆舌につくせぬ苦しみを味わったものもいた。我が気分はどうかといえばひどく思いがけない気持で、別にこれといった感慨のないこと[43]に対して少し憤懣を覚えた。こんなことのために費用を払ったのではなかった、という気持であった。雨が強く降っていたので専用の船室（を利用するという贅沢をした）がとても居心地がよ

かった。屋根はあるがデッキの上なので風通しがよい。カレー[44]に着いた。人なつこい土地の人間が船が着くといつものことなのか、何か用事はないか、知りたいことはないか、と寄ってくる。返事はみな「ノン[45]」ですむ。全部が全部にそれが当てはまるわけではないだろうが、連中を追い払うのにはじゅうぶんだ。ひとりひとり「ノン！」と鸚鵡返しに言いながら、むっとして傍から離れていった。リドゥンが荷物の手配などを済ませてから一緒に市場を歩いてみた。女達が被っている白い帽子で広場は埋まり、金切り声と意味のわからないことばが飛び交っていた。

ブリュッセル[46]へ向かう途中は平坦で単調な旅であった。目立った建物といえば聖オゥマ教会の塔と、5つの塔があるトゥルネィ大聖堂くらいである。リール[47]からトゥルネィ[48]まで、家族の一行と一緒になった。

36）Omnibus. この語の短縮形がbus. 英国ではパリで始まった箱形の乗物を真似て1829年に2台ロンドンで制作中という記録がある。乗物の内部は両側に内向きに座席があり、後部から出入りした。屋上に座席が付いている場合もあった。ラテン語起源の語で「万人向け乗物」の意味。動力は馬。

37）chops. 豚、子牛、または羊のあばら骨付きの肉。

38）料理を保温するために皿に被せて用いる金属あるいは陶磁器製の深目の蓋。

39）困った場面で途方もない描写をするのは知的な気晴らしか。遠くの町へ行った父から幼い時にキャロルが貰った手紙のなかにも人と動物があわてふためいて逃げ隠れる様子を描いたものがある。*The Letters of Lewis Carroll,* p.6, ed. Morton Cohen.

40）給仕人についてはこの旅行中他にも愉快な観察をしている。7月15日、21日、22日、24日、30日、8月6日、24日、9月4日。

41）原文は、the first reading. 議会用語。議会で議案の審議を慎重にする目的で設けた制度。全体審議、各条審議を重ねるもの。序数詞を伴って、「第三読会」のように使う。ここでキャロルはものものしい議会用語を持ち出して重大案件であると笑いを誘う。

42）英国の港からドーバー海峡を渡ってフランスの港への外国航路の旅。

43）初めて祖国を離れ外国へ行くという興奮もないことに対して。

44）フランス北部の、ドーバー海峡に臨む港町。

45）フランス語で 'Non' と書いている。英語の 'No' に相当する。

46）ベルギーの首都。

47）フランス北部の商工業都市

48）ベルギー西部でシェルツ河畔にある工業都市。トゥルネィ・タペストリで有名。

子どもが二人、6才と4才くらいのがいて、小さい方の子は休みなくずっとお喋りをしていた。その子のスケッチを描いてみた[49]。家族のみんながそれを見て、またモデル自身もいろいろと好きなこと（また褒め言葉らしいもの）を言ってくれた。その子[50]は降りる前に母親に言われて私たちに「さようなら[51]」と、別れのキスをしてもらいにきた。

ベルギーの国境にあるブランデンで荷物は外に出され、検査され（というよりも、形ばかり覗かれて）元に戻された。料金はかからない。これまでに受けた試験[52]で、検査料のかからない試験に合格したのは今回が初めてだ。ブランデンからブリュッセルまではドイツ人の旅行者と一緒になった。景色を見ていて気がついたことは木々が何マイル[53]も真直ぐに並んで植栽されている。それがたいていみな同じ側に傾いているために、ちょうど疲れた兵士が長い隊列を組んで平原のあちこちを行進しているように見えた。あるところでは四角に整列し、あるところは「気をつけ！」をしている、しかしたいていはただとぼとぼとあてもなく歩き続けている。背をかがめて、目には見えない重い荷物が上からのしかかっているように。ブリュッセルでは、ホテル・ベルヴィウに宿泊した[54]。食事、この食事は「極簡単な」、「わずか」7コースの食事[55]で、それが終わってから、気分転換に外を歩いた。公園で音楽が聞こえたのでそちらへ行ってみた。公園に腰を掛けて1時間かそこら、なかなか好いオーケストラの演奏を聞いた。クリモーン[56]のような所で、木々の間には何百人という人たちが小さなテーブルを囲んで座っていた。あたりにはランプの灯りがついていた。

7月14日（日）リドゥンと10時に聖グヂュル教会[57]に行った。ブリュッセルで一番立派な教会である。私の好みではない。というのは、言葉が聞きとれたら礼拝に参加できたのだろうけれど、ところどころでひと言がわかる程度であったし、同時に二つのことが進行していた。一つは聖歌隊がずっと聖歌を歌っていて、その一方で司祭は聖歌隊の歌にお構いなく礼拝を進めている、また司祭たちは絶えず小さな列になって、祭壇へ近づき祭

壇の前でほんの一瞬跪づき（それは祈りをするのには短すぎる）、また自分の席に戻っていく。礼拝の主要なところではみなの注意を促すために鋭い音を立てて鈴が鳴り、これが続いている間はほかのことは聞き取れない。周囲の人々を見ると、ある者は自分の祈りに没頭しており（私の隣の男は跪くための台がないので、敷石に直かに膝をついて、祈りを数珠で数えている）、またある者はただ傍観している、その間ずっと人が出たり入った

49）キャロルは絵画、音楽、演劇に興味があり、こどもの頃から線描の絵を描いて自分の作った読み物に添えたりした。ラスキンからは絵を習っても上達の見込みがないと言われるレベルの絵ではあった。アリス・リドゥルに贈った『地下の国のアリス』に自分で挿絵を付けている。このロシア旅行の後半の8月22日にはロシア語しか通じない相手にリドゥンの「コートを出して欲しい」と伝えるために絵を描いている。

50）She ... 子どもは女の子である。

51）フランス語で 'bon soir'と言った、直訳は「おやすみなさい」。Good morning, good day, good eveningなどと同様に別れる時の挨拶として使われているため、「さようなら」とした。

52）初めての経験で好奇心からどんなことになるのかと思っていたが、荷物検査は実に簡単で、ちらっとのぞいただけという検査方法に拍子抜けしている。原文は、the first examination I have passed without a fee. 荷物検査のexaminationとイギリスの大学の試験とを掛けている。大学の試験では、試験料を払ったために試験料を払わないで受けた試験は初めて、と言っている。オクスフォード大学の場合、1866年の学則に定められた試験料が、試験の種類（理系、文系など）にもよるがほぼ1ポンドで、今日の43.18ポンド（9,000円）程度。この換算は*A Social History of Tea*, by J. Pettigrew, published by The National Trust, 2001の換算表によった。

53）1マイルは約1.6キロメートル。

54）2泊する。

55）フランス語で、très simple と書いている。「極簡単な」も「わずか」も、このホテルがそう言っていること。7品出てくる食事は「極簡単な」、「わずかな」食事ではなさそう。日本の「なにもありませんが、」に相当する表現であろう。7月15日を参照。

56）当時ロンドン中心部チェルシーにあったCremorne gardens のこと。（gardensと複数になっているのは、一つの公園のようなところに種々の庭が複数あるため。）

57）The Saints Michael and Gudula Cathedral. Treurenberg の丘にある。1047年にこの丘に建てた新しい教会にブラバント公ランバート2世が聖人グジュルの遺骨を移させたのが始まり。現在の大聖堂は13世紀から15世紀にかけて建設された。地下礼拝所では11世紀の建物の一部が見られる。

りしている。何をしているのか分かるときには礼拝することができるのだが、リドゥンが今やっている典礼の箇所を見つけても言葉を理解するのはまず無理だった[58]。会衆が参加する礼拝というのにしては非常にわかりにくいものだ。むしろ会衆の「ために」行われている礼拝のように見えた[59]。音楽は非常に美しかった、また香を入れた器を揺り動かすのが綺麗な絵のように見えた。二人の少年が赤と白の服を着て祭壇に向かい調子を合わせて香の容れ物を揺すっていた。礼拝の後には、1年に一度、「聖体[60]」が町をねり歩く大行列の儀式があった。行列が教会を出発するのを見て、また戻ってくるのを待ったのだが、1時間以上もかかった。行列の前には騎馬隊が進んだ。その後ろには小さな少年たちの長い列が続いた。大抵の少年は赤と白の服を着ていた。なかには紙でつくった花の輪を頭に載せている者もいた。ある者は幟[61]を持ち、またある者は切った色紙を入れた篭を持っていた。きっと途中で撒くのだろう。その後から白い服を着て白の長いベールをつけた少女たちの長い列が続いた。それから歌を歌う男たち、司祭などが大勢、みな立派な服を着て、幟を持って続いた。幟は行列の後ろの方になるにつれてますます大きく豪華になった。それから聖なる子[62]を抱いた処女（おとめ）マリアの大きな像が運ばれて通った。像は、半球のようでありながらかなり平らな形をした大きな台座の上に立ち、造りものの花で周りが飾ってあった。その後ろからまた幟が続き、そして4本の柱の上に天蓋を置いて、その下を司祭たちが歩いて「聖体」を運んだ。「聖体」が傍を通るときには大勢の人が跪いた。これまでに見たことがない儀式で非常に見事な趣きであった。ただ、おそろしく芝居がかって[63]いて、真実味のないものだ。群集の数はものすごく多いが、みな整然としていた。おそらく何千人という人がいたことだろう。

午後リドゥンは何人か友人を訪ねて出かけ、私はグランデ・プラス[64]を散歩した。美しい市役所の建物[65]がよく見えた。この広場には国内のゴシック建築[66]として世界に誇れる見事なものが並ぶといわれている。夕方[67]、リドゥンと二人で英語の教会[68]に行ったが礼拝時間は午後[69]に

変更されていたため、すでに終わっていた。

7月15日（月）9時40分にケルン[70]へ向けて発つ。途中変わったこともなく、4時に到着した。ここで二度目の荷物検査があり、前回よりももっと大雑把なやり方で、私の旅行鞄などは開けられもしなかった。大聖堂[71]をおよそ1時間見たが、あれこれ描写するよりもただ、かつて見たあるいは想像できるあらゆる教会で最も美しいとだけ言っておこう。もし、敬虔な魂がなにか形になるとすれば、それはあのような建造物になることだろ

58）ベルギーは、公用語として北部地域はオランダ語、南部地域はフランス語、首都ブリュッセルは、両言語併用地域。ドイツ国境付近ではドイツ語が通じる。キャロルはどちらの言語もラテン語、ギリシャ語ほどには得意ではなかった。
59）英国国教会の信徒であるキャロルにとって、礼拝は全会衆が神に祈りを捧げるものであると認識していることがわかる。
60）'host' は、聖餐式の聖別したパン。「聖体」は「キリストの神聖なからだ」の意味。（最後の晩餐でのイエスの言葉、マタイによる福音書26:26などから。）
61）横になびく形のものより、上からぶら下げた形のもの。
62）こどものイエス・キリストのこと
63）一般に芝居はどこの国でもこのような宗教行事に起源があると言われている。
64）ヨーロッパで一番美しいと言われる広場。周囲にはゴシック建築の建物が並ぶ。
65）フランス語で、'Hotel de Ville' とある。
66）フランス北部に発達し、12-16世紀にヨーロッパで広くおこなわれたルネサンス直前の建築、彫刻、装飾などの様式。先に出た聖ミカエル・グジュル大聖堂もゴシック建築の一つ。ロンドンで有名な建物としては議事堂、タワーブリッジ、バッキンガム宮殿、セント・パンクラス駅、チャリング・クロス駅、ゴシック尖塔を持つ教会などがある。
67）evening は日没から就寝時まで。
68）原文はEnglish church. ロシア旅行記には、English Church が7回、English Chapel が1回出てくる。キャロルは英国国教会の聖職者でもある。English Church の語句には、イギリスの非国教会も入ることが、9月1日の記述から分かる。
69）afternoon は正午から夕暮れまで。
70）Cologne. ドイツ語綴りではKöln。ドイツ西部ノルトライン-ヴェストファーレン州のライン川に臨む都市。
71）ケルン大聖堂。1248年に着工し1880年に完成したドイツ最大の大聖堂。次に書いてあるように非常に美しい聖堂として有名。

う。

夕方また散歩をした。川を渡ると町全体を見渡す素晴らしい眺めがあった。これは結構な夕食後のことである（夕食とそれに伴うものはこれまで結構なものばかりであった）。夕食のワインにはルーディシャィマー[72]を1本注文した。このワインは小柄で明るい感じのウェイターが「あれはよいワインと存じます」と勧めてくれたが、そのことばに充分見合うものだった。泊まっているホテルは「デュ・ノール[73]」。

7月16日（火）教会を数カ所回った。どれも特別なことはなかった。一つは、「聖ウルスラ[74]と11,000人の処女[75]の教会」、遺骨[76]は前面にガラスを入れた箱に入っていて、覗いてみたがほとんどなにも見えない。聖ゲレオン教会[77]、10面の変わったドームがある納骨堂、使徒教会、ルーベンス[78]による聖ペテロの磔[79]が祭壇背面に描いてある聖ペテロ教会（この教会の近くに、ここでルーベンスが生まれた、という銘版の掛かった家があった）、それにカピトリオの聖マリア教会[80]を見学した。

リドゥンは1時半にターブルドット[81]にいった。私はこの機会に[82]使徒教会に戻ってそこで結婚式をみた。大勢の人がきていた。こどもたちもたくさんいて、勝手に教会の中を走り回ってはいたが静かにしていて、イギリスの子どもたちとは大違いである。結婚する二人と関係者は内陣に入り、可動式の机に向かって跪いた（式の間はずっとそうしていた）。数回の祈りといくつかの質問と応答で結婚式は始まったのだと思う。それが済むと、司祭は具合よく祭壇に寄りかかりながら、聖書を閉じて長い話をした。準備はなく即興の[83]話のようだった。それから聖水[84]の入った器らしいものを二人の上で揺らした。次に書記が台帳とペン、インクを持ってきて祭壇の上に置いた。司祭は長い間かかってそこに書き入れた。その間に紳士が二人進み出て司祭に何ごとか囁いていた。たぶんその二人は証人で自分たちの名前をそれぞれ告げたのであろう。それが済むと司祭は結婚した二人に軽く会釈して式が終った。教会をいくつか見て回った。教会には人が

72）Rudesheimer.ドイツの高級赤ワイン。キャロルはRudischeimer と綴っている。
73）'du Nord' . ノール はフランス北部の県。
74）処女殉教者。ケルンの守護聖人。王女ウルスラは不本意な結婚を避けるために友人と共に自分の父王のいるブリテン島を去りローマを訪ねる。その帰途にキリスト教の信仰を理由にケルンのフン族によって虐殺された（ヨーロッパの北部はキリスト教の浸透が遅かった）。紀元300年頃といわれる。クレマティウスという人物が乙女たちが殉教した場所に記念のための教会を建てたという石碑がケルンで発見されている。その石碑は四世紀末か五世紀初頭に刻まれたものという。9世紀には伝説の形で伝えられていたらしい。絵画には殺害された矢を数本手にした姿で描かれる。
75）古くはウルスラと10人の乙女の11人であったのが、どのようにして千倍に増えたかについては、他にも若い女性がケルンで殉教したらしいことが結びついたのだろうと推測されている。
76）殉教者ウルスラの遺骨。
77）7世紀-13 世紀に長い年月をかけて建造された。
78）Peter Paul Rubens（1577 - 1644）．フランドルの画家。
79）キリストの12使徒の一人で、元は漁師であった。弟のアンデレと共に「人間を漁る漁師」にしようとキリストから言われ、その名前が「岩」という意味のアラム語Kephasからきていたことから、キリストはこの岩の上に教会を建てると宣言した。キリストが捕らえられたとき、ペテロは夜明け前に3度知らないと否定して夜明けを告げる鶏が鳴いたという話がある。キリストの死後、ヘロデ・アグリッパに捕らえられるが脱出してローマに行き教会の初代司教になる。ネロ帝のときに捕らえられ殉教する。ペテロはキリストと同じ形では勿体ないと逆さの磔に掛けられたという伝説がある。おそらくそれが描かれている。他に逆さの磔を描いた画家にミケランジェロ、カラヴァッジオ、ジョルダーノなど。
80）トランプのクラブの形の「三葉形内陣」を持つ教会（1065年献堂）、ドイツ語読みでは聖マリア・イム・カピトール教会。
81）the table d'hôte. ホテル、レストランで常連などが食べる定食用テーブルを指す。ここではそのテーブルで決められた時間に予約した客に一律に供される食事を指している。
82）キャロルは日頃から昼食はとらないか、とってもシェリー酒一杯にビスケット程度であったため、昼食に行く代わりに。
83）用意した説教の原稿を読み上げるのではなく、という意味で、説教は、主に原稿を読み上げるタイプと原稿なしに行うタイプとがあり、後者を良しとする人々もあった。キャロル自身は通常は説教の準備をしていたようだ。
84）宗教儀式などに用いられる聖別された水。

たくさんいて、みな自分の祈りを捧げているのが印象的だった。ある教会では同時に三人の女性が三つの告解席[85]で告解をしていた。彼女たちは自分の手で顔を隠していた。司祭[86]は自分の顔の前にハンカチを掲げていた。しかし仕切りの幕はなかった。自分で祈りに来たらしい様子の子どもがとても多い。なかには祈祷書[87]を持っている子どももいるが、みんなが持っているわけではない。子どもたちは歩き回っている見学者を見ているようだがやがて自分の祈りに戻って行く。そしてひとりひとり立ち上がると外に出て行った。入るのも出るのも自由になっているらしい。こうした祈りをしている人のなかには男たちや少年の姿は見えない（ブリュッセルの日曜日の礼拝ではたくさんいたのだが）。午後はリドゥンと大聖堂の天辺まで上った。そこからは、白い壁に灰色の屋根がずっと続く町の素晴らしい風景と、遠く長く続くライン川が見えた。ベルリン[88]には夜行で行くことにしていたので夕方7時15分の列車に乗り、翌朝8時頃に着いた。車内では向かい合った座席を引き出すと両方併せて一つのベッドになった。緑色の絹のシェードがついていて、それをランプの上に引くと車内の明るさを落とすことができた。夜は具合よく寝ることができた。ただ、気の毒にリドゥンは眠れなかったようだ。

7月17日（水）　ベルリンにて。ホテル・ドゥ・ルシ[89]まで馬車（ドゥロシキ[90]とここでは呼んでいる）で行くのに、番号のふってある切符を渡されて、溜まり場にいるその番号の馬車に乗せられた。英国ではとても長続きしないやり方だ。昼間見学したのは、騎乗したフレデリック大王の立派な像（ラウホ[91]作）、有名な「アマゾンと虎」（キシュ作）[92]、美術館を二つさっと回ったが、どちらも時間があればよく見たいところだ。3時にターブルドット[93]へいった。（メモ：「フラマンデ風ポタージュ」とは、羊のスープのこと、鴨はチェリーと共に食されること、食事の時に清潔なナイフとフォークは望むべくもないこと。）夕方はぶらぶら歩きまわった。聖ペテロ教会（福音主義）で礼拝が行われていたので入って20分ほど非

常によどみのない即興[94]の（ドイツ語の）説教を聞いた。説教した人は最後にその場で考えた[95]長い祈りを捧げ、主の祈り[96]を唱えた。それから説教者は立ち上がると（みなも一斉に立ち上がり）、腕を差し伸べて会衆を祝福した。そこでオルガンの演奏が始まり、説教した人は退場し、会衆は再び椅子に座り長い非常に節回しのよい賛美歌を歌った。

7月18日（木）もう一度大美術館へ行き、前より長い時間をかけて見て回

85）信者が罪の告白をし、司祭を通じて赦しを受ける場所。狭い小部屋になって司祭と信者の間に仕切があるところもある。ここでは一人の司祭に3人の女性が同時に懺悔を聞いてもらっている。仕切の幕がないため、それぞれ手やハンカチで顔を隠している。
86）the priest と単数形である。一人の司祭が三人の告解を同時に聞いていて、仕切の幕もない状態。この教会では罪を告白するという個人のことがこのような形でおこなわれている、というキャロルの観察。
87）books. 教会で用いるbooksには、The Holy Bible と The Book of Common Prayers がある。祈祷書には教会が定めた折々の祈りのことばが書いてある。祈りにきた子どもたちは、祈祷書を用いて祈る。
88）1945年までドイツ、プロイセンの首都。
89）6泊する。
90）此処ベルリンで使われているこの語は、もともとはロシア語。意味は、軽四輪馬車。
91）クリスチャン・ダニエル・ラウホChristian Daniel Rauch（1777 - 1857）、ベルリンの彫刻家。ローマに留学中の友人のなかには後にベルリンにフンヴォルト大学を創立し初めて言語を体系としてとらえたカール・ヴィルヘルム・フォン・フンボルト （1767 - 1835）もいた。注116参照。
92）「アマゾンと虎」は1837-41年の5年間をかけて制作され、この作品により彫刻家キシュは「馬の彫刻にかけてはベルリンで第一人者」の賞を受けた。オーガスト・キッシュAugust Kiss（1802 -65）．ベルリンに生まれベルリンで活躍した彫刻家。ベルリンアカデミーの会員。1841年大学で教授となる。「アマゾン」の他に、青銅の彫刻に「聖ジョージと竜」（1855）などがある。
93）注81参照。
94）注83参照。
95）祈祷書の決まり文句で祈るのではなく、という意味。
96）Lord's Prayer.「マタイの福音書」第6章でイエスが教えたとされる祈りのことば。

った（1243点の絵がある）。ここの絵画は大美術批評家ヴァーゲン[97]が配置を提案している。ところが彼のカタログにはほとんど批評らしいものはなく、ただ個々の絵の中で見るべきところを列挙しているだけだ。絵の大多数は宗教画で、そのなかには聖セバスチャンが（既に矢で射られて[98]）入っている。またさまざまな画風で「聖母子」を描いたものが多数あった。その中には何枚か、御子[99]を地面に置いて、マリアがその前に跪づき祈っているものがあった。ある絵は、たいへん色使いが綺麗で、ヨセフ[100]が眠っていて、その耳に天使が囁いていた。バベルの塔[101]の絵が良かった。その絵には何千もの人が描いてあった。エデンの園[102]の絵には、あらゆる動物と鳥がいた。有名な版画も数点あった、例えば聖アントーニオスの試練[103]などである。仕上げがこれまで見たなかで最も優れていたものとしては、ヴァン・ヴァイデン[104]の三連祭壇画[105]である。我らの主の死後の場面を表している。マリアが泣いているところでは涙のひと粒ひと粒を丁寧に半球（あるいは半球よりもっと球に近い形）に塗ってそれぞれに光りと影が入っている。また、床の上にある一冊の本は、頁が少しぱらぱらと開いている。本の留め金が下がっているところにはその影が本の厚みの切り口の上に斜に落ちている。その影の長さは2.5センチほどもないのだが。頁が少しでも開いている部分では下の紙に上の紙の影が映っている。ここの美術館の絵画は全体としてはあまり美しいという印象は受けないのだが、どれをとってもよく見るとその手法には驚くところがある。美術館全体を正当に評価するのには幾日もかかるだろう。ターブルドットを済ませると雨がだいぶ降っていたので少し歩いて聖ニコラスの古い教会[106]を見ただけだ。

7月19日（金）私たちが起きたのは（目覚まし時計で）6時30分だった。7時30分過ぎには朝食をして、午前中は聖ニコラス教会へ行った。教会の側廊は見えないように完全に遮られていて、しかも側廊[107]が建物の東端のアプス[108]に円になって並ぶ柱の外側をぐるりと回ってついているとい

うものは初めて見た。祭壇はその円に並ぶ柱の内側にあり、後にはどこにでも見られる大理石の彫刻が折り重なるように立っている。その背後は、

97）Professor Doctor Gustave Waagen （1794-1868）.
98）ミラノに生まれローマで殉教（3世紀末）。皇帝に信仰を明かさずに、その地位を利用し獄中のキリスト教徒を保護していたが密告され、皇帝の命により矢を射かけられ刑場に放置された。一命を取り留めたものの逃亡せず、皇帝の面前で撲殺された殉教者。
99）嬰児のイエス・キリストのこと。神の子、と呼ばれている。
100）許嫁のマリアが懐妊していることを知って離縁しようとしていたヨセフに夢の中で天使がその子は聖霊によってマリアに宿り、生まれてくる救い主であることを告げている。
101）旧約聖書の「創世記」第11章の話。人間が力を合わせて天に届く高い塔を作ろうとしているのをみて、神は人間がそれまでに話していた同じことばを互いに通じないようにする。ことばが通じなくなって塔の建設が止まり、人間は散り散りに分散していった。
102）旧約聖書の「創世記」第2章に語られている、神が天地を創造してのち、人間の男アダムとこれを助ける女イヴを作り住まわせた楽園。ここで、人間は神に創造された鳥や動物に名前をつけた、という。禁断の実を味わうという罪を犯して人間は楽園から追放された。
103）英語の原文はSt. Anthony's temptation. 聖アントニオ（215年頃-356年）。修道生活の父と呼ばれ、エジプトの修道士。砂漠で打ち捨てられたピスピル要塞に住む。禁欲生活において激しい誘惑を体験し、ついにそれにうち勝った。誘惑したのは怪獣の姿をとった悪魔、また虚栄の象徴としての若い女性を先立てて近づく悪魔とされ、美術の主題となった。
104）Rogier van der Weyden（1399/400- 1464）. 生年は1399年とする説と1400年とする説とがある。トゥルネイで生まれ、1436年にブリュッセルに移りそこで没した画家。15世紀末までオランダの絵画に影響を与えた。
105）triptych. ヴァン・ヴァイデンには、他に十字架上のキリストの三連画（1445年頃）や、パリのルーブル美術館には中央にマリアの受胎告知を描いた三連画がある。
106）キャロルが見た13世紀末に建てられた古い教会は、第二次世界大戦で破壊された。
107）an aisle. 通常は中央通路の「身廊」と平行している、場合によっては列柱などで区切られた通路で、アイルまたは側廊という。ここでは、祭壇奥のアプスを囲む列柱の外側を廻っているというので、珍しい。
108）the apse, 教会堂の祭壇の後方で丸屋根のある半円形の窪みの部分。建物の東端で一番奥の部分にある。初期の教会堂では、ここが司教の座であった。

古い絵（主に聖書のテーマからとった絵）が描いてある仕切りがあり、絵の一枚一枚はそれぞれ亡くなった人を記念して描かれていた。ここでもドイツの歴史学者プッフェンドルフ[109]の墓を見た。そこからシュロス[110]つまり王宮へいった。ガイドについて他の見学者たちと豪華な部屋の数々や大きな円形のチャペルを見た。どこでも金が塗れるところには、ぜんぶ金で塗ってあった。大きな階段を通って中へ入っていった。その階段には段がなく、舗装した道がなだらかに上っていくのに似ていて、ウィットビー[111]の道を思い出した。ところで、ガイドは各部屋を見せて謝礼を受け取ってしまうと、後はまったく見物客を放り出して、われわれは自分で外へ出る通路を探さなければならない。ぐるぐる回る裏階段を通ってバケツがあり修理作業員がいるところを通っていく羽目になった。ここに大きな教訓がある。教訓の書きだしは「これぞ王侯たちの運命なり…[112]」で始まる。午前中はこの後、美術館を二つ見た。

ディナーの後、外に出た。乗合馬車の二階に上がってシャーロッテンブルク（西へ4マイル[113]ほどの所）へ向かう。途中、ウンテル・デン・リンデン[114]の眺めが雄大であった。そこにはもう一つの城[115]があり、たいへん綺麗な所であった。一番素晴らしかったのはプリンセス[116]が葬られている礼拝堂である。墓は見事な大理石造りで寝椅子に横になっている姿が刻まれて、天井の窓には幾枚か菫色のガラスが嵌め込まれ、それが大理石像にえも言えない柔らかい、夢見るような効果を出していた。

夜はぶらぶら歩いてユダヤ教の礼拝堂（シナゴーグ）[117]を見学した。それは見ておく価値が充分ある、とニューヨークからきた紳士に言われた。その人（とその妻）には食事の席で会ってとても気持のよい人に思われた。二人はドイツ語を一言も知らないままここに来て、そのために日常のこともなかなかままならないのだそうだ。

7月20日（土）今日は初めにユダヤ教の礼拝堂に行った。礼拝が進行していたので、それが終るまでずっとそこにいた。全体に私にとってはまった

く新しいことばかりでたいへん興味をもった。建物はとても豪華で、内部の壁は金色に塗ってあるか装飾がある。アーチはほとんどのものがみな半円形をしているが、なかにはここにスケッチしたような形のものもある。東の端の天井は半球形のドームになっていて、中に柱の上に載った小さいドームがあり、その下に戸棚がカーテンで隠れていて、そのなかに律法の巻き物[118]が入っている。カーテンの前には朗読用の机があって東を向いている。その前には小さい机が西向きに置いてある。小さい机は礼拝の間にただ一回だけ使われた。他の部分は一般席になっていた。リドゥンと私は会衆に倣って帽子を被ったままだった。男たちはたいてい自分の席に着

109）Samuel von Puffendorf（1632 - 1694）．法律、哲学、数学をライプニッツとイエナで学び、1661年、ハイデルベルク大学の教授。自然法と民事法を学問研究の対象とした最初の人と言われる。ブランデンブルグ家に仕え、亡くなった時には枢密顧問官であった。
110）原文はドイツ語でSchlossと書いている。城、大邸宅の意味。
111）イギリスの北部にあるヨークから北北東に約77キロのところ、エスク川の河口にある北海に臨む港町。町の中の道は殆どみな狭く、一部には勾配が非常に急な道がある。キャロルはオクスフォード大学の学生時代に1854年7月20日から2か月間、ウィトビーでバーソロミュ・プライス教授による数学特訓の合宿に参加した。
112）原文は、Such is the fate of princes ... 詩人ポープが英訳した『イリアド』VIII 595に'For such is Fate, nor can't thou turn its course.'　がある。
113）約6キロ。
114）Unter den Linden 意味は菩提樹の下。ベルリンの中心にある有名な大通りの名。1647年に菩提樹を植えた通りとして作られた。
115）シャーロッテンブルク王宮。ベルリン一の大きい王宮。
116）キャロルは名前を書き入れていないが、プロシアのフレデリック・ウィリアム王の妃のルイーザ・オーガスタ・ヴィルヘルマ・アメリアLouisa Augusta Wilhelma Amelia（1776-1810）。この像はクリスチャン・ダニエル・ラウホの作（注91参照）。王妃ルイーザは貧しいラウホの才能を見いだし、1804年にサンドレッキー伯爵の援助でローマに留学させた。この大理石像はプロシアで広く愛された王妃が亡くなった翌年1811年に依頼によって制作し、これによって腕を認められラウホは彫刻家として有名になった。
117）the Jewish Synagogue.
118）律法の巻物というのは律法の書を書いた巻物であろう。律法の書は旧約聖書で初めの5書を指すが、あるいは旧約聖書全体のことか。

くと、白い絹のショールを刺繍のある袋から出して、それを首の後ろから懸けて両端を前に平行に下げる[119]。非常に変わっていて、ショールの上端には金の刺繍のように見えるものが施されていて、おそらくそこに聖句が入っているのであろう。男たちは時々前に出てその日の日課の聖句を朗読した。朗読は全部ドイツ語であった。しかし美しい曲に合せたヘブライ語[120]の詠唱もたくさんあった。聖歌のなかには非常に古いものがあり、おそらくダビデ[121]の時代にまで遡るのであろう。ラビ[122]の長は音楽の伴奏もなくひとりでたくさん詠唱をした。会衆は立ったり座ったりを交互におこなった。跪く者は誰もいないようだった。

午後はポツダムで過ごした。宮殿と庭園の町である。ニューパレス[123]（ここに我が皇太子妃[124]が住んでおられる）は、ベルリンのシュロスよりももっと立派であった。そこにはフレデリック大王の数々の部屋、書き物机、布地の部分が王の飼い犬[125]の爪で掻きむしられている椅子などを見た。王の墓のある教会にも行った。簡素な墓で墓碑名もないのはそれが王の遺志であったからだ。一番美しいのは王が気に入っていた宮殿サンスーシ[126]である。庭園をゆっくりと歩いた、昔の様式に則ってデザインされている。真っ直ぐに続く並木は複数の中心を持つ放射状の形に植えられている。非常に美しいのが階段状になったテラスガーデン[127]で段々に上へ高くなっている。オレンジの木[128]がたくさんある。ポツダム全体にやたらとある美術品の量は夥しい。宮殿の屋上は彫像の森の様相を呈しているところもあるし、彫刻は庭園の至る所に台座に載せて置いてある。そこで、ベルリン建築の2原則というのが私には次の二つになると思われる。「屋上はどこでも都合のよい所さえあれば、男の像を立てる。片足で立っているのを置くのが一番良い。地上で場所があるところには胸像を台座の上に円形に配置し、相談している風に顔はみな円の内側に向ける。あるいは大きな男が動物を殺しているところ、殺そうとしているところ、殺し終ったところ（現在時制[129]が好まれている）が多い。動物に刺さった槍先は多ければ多いほどよい。動物といっても本来は竜である。但し彫刻家の腕に

よって竜が無理な場合は、ライオンか豚にしても差し支えない[130]。」

この動物殺戮方針[131]がどこもかしこも容赦なく単調に繰りかえされていて、そのためにベルリンの町のなかは化石となった屠殺場のように見えるところもある。ポツダムへの遠出は全部で6時間だった。

7月21日（日）リドゥンはドーム・キルヒェ[132]でのドイツ語の礼拝に行

119）these（white silk shawls）they put on square fashion.
120）旧約聖書はヘブライ語で書かれ、新訳聖書はギリシャ語で書かれた。
121）紀元前10世紀のイスラエル王国2代目の王。羊飼いの少年時代にダビデはペリシテ人の大男ゴリアテを倒した。ミケランジェロのダビデ像が有名。
122）ユダヤ教の指導者
123）The New Palaceは1763-1769に建てられた。長さ220メートルの3階建てで室数は200を越える。一階から屋上まで外壁には全部で428の大きな彫刻が立っている。
124）原文はour own Crown Princessで、これは、ヴィクトリア女王の長女でプロシャの皇太子妃になっているヴィクトリア・アデレイド・メアリ・ルイーズのこと。1840年生まれ、1858年に17才でプロシャの皇太子フリードリッヒ・ヴィルヘルムと結婚。彼女の弟で英国皇太子のアルバート・エドワードは1863年にデンマークの王女アレグザンドラと結婚し、こちらは英国の皇太子妃である。
125）by the claws of his dogs. 犬は複数いた。
126）Sans Souci は「杞憂のない」という意味のフランス語。プロイセン王フレデリック2世の離宮。
127）英国ではあまりみかけないが、ヨーロッパにはふつうに見られる傾斜地に作られている庭園で、段々と上へ高くなり、一番上に邸宅がある。
128）地中海地方に育つオレンジの木をヨーロッパの貴族たちは育てていたようで、パリにあるオランジェリ美術館も元々はオレンジの木を栽培した温室であった。
129）present tense. 英文法では現在時制と過去時制がある。ここでは彫刻に現れた動作に言語表現をからめたキャロルらしい記述。三つの表現、killing; about to kill; having killedは、いずれも時制を表す主動詞がないから時制とは言えないが意味の上では動作が進行中か、これから動作が始まるか、動作が完了したか、の3つを区別している。
130）竜、dragon は伝説の怪獣で絵画や彫刻のテーマに取り上げられる。ライオンは、百獣の王と言われているが、豚では芸術的モデルとは言い難く。笑いを誘う。
131）大袈裟な表現をしている。この後ペテルブルクで市内を歩いたときに、このベルリンの彫刻の特徴を想起している。7月28日参照。
132）Dom-Kirche．主教座聖堂。大聖堂ともいい、主教の座がある聖堂で、各教区の中央会堂。

った。私は唯一つある英国国教会の礼拝（朝の礼拝）に出た。それはモンビジョン宮殿[133]のなかのその目的のために貸す一室でおこなわれた。リドゥンが夕べの礼拝に出ている間、私は公園の中をぶらぶら散歩した。人々はベンチや美術館の石段に三々五々座り、子どもが大勢遊んでいた。かれらの好きな遊びは輪になって手をつなぎ、輪の外を向いて踊ること。踊りながら可愛い歌を歌った。歌の言葉は私には理解できなかった。一度、子供達は、大きな犬が寝そべっているのを見つけて、すぐにその犬の回りに踊りの輪を作った。そして犬に歌を歌ってやった。そうするために子どもたちは輪の内側に向いていた。犬は今までにみたことがないこの親切にすっかり面喰らっていたが、じきにこれは我慢するほどのものではないと分かってきて、とにかく逃げ出すことにした。私と同じようにぶらぶらしていたドイツ人のたいへん感じのよい紳士に出会って、その人と会話のようなことをした。私の言う不明瞭なことばの意味をよく辛抱して見当をつけ、おそらくはとてもひどい私のドイツ語の文、というかそれがドイツ語というに値するとしての話なのだが、それに助けを出してくれた。とは言っても私の話したドイツ語は私が聞いた英語と同じくらいには出来ていた。それは今朝の朝食のときのことで、冷製のハムを頼んだのに、ウェイターは別のものを持ってきた。彼はテーブルの向こうから身を乗り出して自信のある低い声で言った、「私は持ってけまさ、数分したら冷製のハムざを[134]。」

10時15分にダンティッヒ[135]へ向かった。そこに到着したのは翌朝10時で、道中はまあまあであった。

7月22日（月）着いてから今日一日はドーム・キルヒェを見て、ここの素晴らしいとても興味深いオールド・タウン[136]を見て回った。通りは狭く曲がりくねっている。家は非常に高く、ほとんどどの家にも天辺に奇妙な飾りの破風がある。変わった曲線とジグザグの飾りをもつ破風だ。ドーム・キルヒェは非常によかった。教会のなかを3時間ほど見て、それから塔の上に上ってまた3時間。塔の高さは328フィート[137]で、上からはオー

ルド・タウンとモルダウ河[138]、ヴィスワ河、またバルト海が遠く広がる景色が見事であった。教会ではメムリンク[139]が描いた最後の審判の大きな絵を見た。これまでに見た最大級の驚異に入るものだ。何百という人間が描かれて、その一つ一つの顔がたいていどれも小さな肖像画といえるくらいに精密にできている。悪霊を描いているところは、この画家が想像力において計り知れない力を発揮できることを証している。ただあまりに奇怪すぎて恐さがない。教会には祭壇と祭壇の後ろの壁面装飾がたくさんある（ここは現在、ルター派の教会になっている）。折り畳み式の扉がついていて、扉の外側も内側も彩色模様が施され、なかには極端なまでに着色し金メッキした十字架の磔を表す高浮き彫りがある。その一つで、主が十字架を担っているところに斬新な着想があった。柱はネジで地面に固定してあり、そのネジは十字架の一番高い先端を抜けて突き出し、ネジにはナットがついていて、そのナットを一匹の小鬼が回している、このことが十字架を担う苦しみをさらに大きくさせている。内陣の天井の上の方の梁に

133）この宮殿は英国のジョージ1世の王女ソフィー・ドロシーの為に建てられた。プロシャ国王フリードリッヒ・ウィルヘルム4世は1855年に宮殿の北の門楼の中の一部屋を英国国教会の礼拝のために提供した。

134）ウェイターは自信を持ってこんなことばを話している、'I brings in minutes ze cold ham.'

135）Danzig ドイツ名。ポーランドの町で、ポーランド名はグダニスク。（ヨーロッパで第二次世界大戦が始まった場所。ソ連が崩壊することになった一つの原因はグダニスクでの造船所のストだった。）

136）旧市街の意味だが、固有名詞として使われる。

137）100メートル。

138）キャロルの誤解であろう。The Moldauとあるが、モルダウ河は現在のドイツとポーランドの境にあるエルベ河の上流であり、ダンツィヒからはエルベ河もモルダウ河も見えないはずである。ダンツィヒには、モトラヴァ河（Motlawa）という綺麗な河が流れているので、これとの勘違いではないか。ドイツ語訳の日記ではMottlauとしてある。

139）Hans Memling（1430? - 94）．セィゲンシュタット、現在のドイツのフランクフルトに生まれた。ロジャ・ヴァン・デル・ヴァイデンの影響を強く受けた。1466年ブルージュに移る。そこの聖ヨハネ病院に飾る宗教画を多数描いた。特に肖像画に優れて丁寧に生き生きと描いた。

は巨大な十字架が立ち、周りには実物大を越える大きさの、泣いている女たちの像があった。聖具室の二部屋には古い祭服や遺品、楽器などの立派なコレクションがある。シャジュビュル[140]だけ数えても75もあった。それに（非常に珍しい）長円形のヴェシカも二つ、これは、なかが空洞になっている長円形に作った針金の容器でその中には聖母マリアの像を納めている。向かい合った2本の針金[141]は魚（ΙΧΘΥΣ）[142]を表すと考えられている。以前はみな内陣の天井から鎖でぶら下げてあったものだ。教会の内部は全体に白と金色で、天井は非常に高く、立派な高い柱がたくさんある。

夕方はぶらぶらと歩いて、夕暮れ時に狭い小路を抜けてホテルへ戻ってくるときに、道の中ほどで銃剣を構えて見張りをしている小柄な兵士の脇を通った。兵士はこちらを恐い顔をして見たが別に何もせずに通してくれた。

ホテルに戻ると、緑の鸚鵡が止まり木にいた。それに向かって「プリティポール[143]」と呼びかけてみたら、頭を片方に傾げてちょっと考えていたが、何も言わなかった。ウェイターがやってきて無言の理由を説明してくれることには、「エル　シュプリヒト　ニヒト　エングリッシュ、　エル　シュプリヒト　ニヒト　ドイチュ[144]」と言った。気の毒にこの鳥はメキシコ語しか話せないらしい！　リドゥンも私もその言語はひと言も知らないので、ただ鳥を哀れんでやるばかりだった。

7月23日（火）ぶらぶら歩いて、写真を買った。11時39分発でケーニッヒスベルク[145]に向かった。駅へ行く途中に、これまで見たことがない「裁判官閣下」のたいそうな権威を目撃した。小さな男の子が一人、治安判事のところかあるいは牢屋へ引いて行かれるところで、（おそらくスリでもやったのだろうが）哀れな子を引き立てるのに制服の兵士が二人、一人は前で一人は後ろで銃剣を構えて、無論逃亡しようとするものならいつでも撃てるようにとしっかりと構えてものものしく行進をしていた。

ダンツィッヒとケーニッヒスベルクの間の風景はまことに退屈であった。ダンツィッヒ近郊で通りがかりの小屋には屋根の上に巣があって、足の長い大きな鳥が何羽かいた。鶴[146]ではないかと思うが、ドイツの子どもの本には鶴は屋上に巣を作ると書いてあり、悪い子を攫っていくのだと教えていた。

夕方7時頃にケーニッヒスベルクに到着し、ドイチェス・ハウス[147]に宿をとった。

夜10時半。通りからキーキーと音が聞こえてきたので外を覗いてみたら、巡査（あるいはそういう類いの人）が巡回をしているところで、道の真ん中をゆっくりと行進し、数メートル進む毎に立ち止まっては、笛を口に当てて、子どもの玩具のラッパとそっくり同じ音を立てていた。ダンツィッヒでも真夜中頃に同じ音がしていた。その時は外をうろついている子どもの仕業だろうと思った。

7月24日（水）一人で出歩いてきた。リドゥンは具合が悪くて一緒に行けなかった。見学したなかでアルトシュタット教会[148]は塔の天辺へ上って、そこから周囲を広く見渡すことができた。鍵を持っている寺男を探し出し

140）司祭がミサ聖祭で着用する袖のない上衣。chasuble. MSでは、chasybles.
141）上下が閉じた向かい合った２本の針金を魚の形とみている。
142）ギリシャ語で魚。ギリシャ語で「イエス・キリスト、神の子、救い主」という句（ローマ字書きすると、lesous Christos Theou Yios Soter）の5つの語の頭文字を並べると、魚の意味のギリシャ語（ローマ字書きで、ichthys）の単語が得られるところから、ローマ時代のキリスト教迫害の時に「魚」のしるしをキリスト（教徒）の象徴として用いたことに由来する。
143）'Pretty Poll'. Pollあるいはpoll parrot は、籠に飼ったインコ、オウムのこと。
144）「彼は英語を話さない、彼はドイツ語を話さない。」
145）数学史上、有名なところ。キャロルは数学を専門としていた。
146）足が長く、首が長いのでcrane と書いている。コウノトリ（stork）のことであろう。
147）Deutsches Haus 直訳は「ドイツの家」。3泊する。
148）Aldstadt Kirche アルトシュタット・キルヒェ。

て塔に上り、そこから見えているものが何かをいろいろと聞いてみるのは、私のかよわいドイツ語の語彙力にはまことに厳しい要求になった。町の中を歩いてみたが見るべきところはなかった。しかし後になってから町の一番古い一角を見過したことが分かった。

夕方は、リドゥンとビュルゼ庭園[149]に2時間余り座っていた。素敵な音楽を聞きながら、ここの人たちが実に楽しそうに過ごしているのを見ていた。年輩の人たちは小さな卓を囲み（一つに4人とか6人で座り）、女たちは手仕事を持ってきていて、子供たちはあたりを4、5人が一緒になって手をつないで歩きまわっている。ウェイターはあちこち回って注文に気を配っていた。しかし、アルコールを飲むことはあまりないようだ。ちょうどロンドンの家庭で客間にいるような雰囲気があり、なにもかも落ち着いていて礼儀正しい。みなお互いに知り合いどうしのようで、ブリュッセルで目にした光景[150]よりもずっと和やかで打ち解けて見えた。

ドイチェス・ハウスに宿泊して一つ特別なことがあった。それは、部屋からベルを何時でも何回でも鳴らせる、ということ。鳴り響くベルを止める方策はまったく取られない。鳴らしたベルに応答があるのは平均5分から10分かかり、そして必要なものがくるまでに1/2から3/4時間かかる。

7月25日（木）一日歩きまわった。しかし書いておくほどのことはない。但し一つだけ気がついたことを挙げれば、ドイツ語と同じことをヘブライ文字で書いている店が何軒かあった。夕方、私は劇場に行った。いろんな意味で割とよかった。歌とそれから演技のなかにはとてもよいものがあった。芝居は「紀元1866年」だったが、ところどころで少しことばがわかった程度であるから、筋はほとんどわからない。登場人物のなかに「イギリスの新聞通信員」というのがいた。この変わった男は兵士たちの野営（サドヴァ[151]の前に）の真只中に登場し、全体に白っぽい服装で、非常に長いフロックコートを着て頭の後に山高帽を載せていて、どちらの色もおおよそ白であった。この男は最初に出てきたときに、挨拶代わりに「はよ

う」と言った[152]が、その後に喋ったのは下手なドイツ語らしかった。兵士たちからは嫌な奴と思われていて、結局彼はドラム缶の中に落ちて一巻の終わりとなった。

　ケーニヒスベルクで一番売れているはずのもの（商店のうちの半分が置いているものは）手袋と花火である。それなのに手袋をせずに出歩いている紳士をたくさん見かけた[153]。多分、手袋は花火をする時に手を保護するために使われるだけなのであろう[154]。

7月26日（金）午前中、ドーム・キルヒェ[155]へ行った。古い立派な建物だった。その後、12時54分の列車でサンクト・ペテルブルク[156]（あるいは一般にペテルブルクと呼ぶらしい）へ向かい、翌日の午後5時30分丁度に到着した、28時間30分の旅であった！　運悪く、我々の乗った車両の車室[157]には4人が横になれるスペースしかなく、リドゥンと私の他に淑女が二人と紳士が一人いたので、厚地の旅行鞄とコートを枕にして私は床に寝た[158]。実に贅沢に、とは言えないが具合よく夜通しぐっすりと眠る

149）Burse-Garten.
150）7月13日夕方に行ったブリュッセルの公園のこと。
151）ボヘミア北東部の村。前年1866年にプロイセンが勝利をおさめた地。
152）He said "morning".
153）当時のイギリスの紳士は外出時には手袋をしていた。キャロルは夏にはグレーの木綿の手袋をした。
154）店先でよく目についたのが手袋と花火で、しかも手袋をしている紳士をあまり見かけないために、このような冗談を思いついている。
155）7月22日には、ダンツィッヒのドーム・キルヒェを見学している。
156）St. Petersburg. ロシア北西部、フィンランド湾の奥に位置する都市。1712年にピョートル大帝が建設しモスクワから遷都、西欧化の窓となった。帝政ロシアの首都（1712-1918）で、その後Petrograd （1914-24），Leningrad（1924-91），現在のサンクト・ペテルブルク、と名前が変わった。
157）一つの車両は仕切をしたコンパートメントとよぶ車室に分かれそれぞれ入口にドアがある。
158）同じ車室に女性が2人と男性が3人いて、おそらくキャロルが男性3人の中で一番若かったから「床に寝た」のだろう。不満を言わないところが、紳士。

ことはできた。一緒になった紳士は英国人で、ペテルブルクに15年住んでいて、パリとロンドンへ行って帰る途中であった。彼はたいへん親切にわれわれの質問に答えてくれて、またペテルブルクを見物するために役立つことを、実際にことばを発音するなどして、いろいろ教えてくれた。ただこれから先はロシア語以外のことばが喋れる人は非常に少ない、という暗い見通しを話してくれた。

その英国の紳士はロシア語の非常に長い単語の例を挙げて、次のような語を書いてくれた。３АЩИЩАЮЩИХСЯ　英語の綴字では、zashtsheeshtshayoushtsheekhsha[159]と書く。このものすごい語は分詞の複数所有格形で、「自らを守る人たちの」という意味である。

この紳士はとても楽しい旅の連れになり、2日目には私と3回チェスをやった[160]。ただここには書いておかない方がよかったのだが勝負はみんな私の負けだった[161]。

ロシアの国境からペテルブルクにかけては平坦で変化がない。たまに毛皮の帽子とチュニックにベルトというよく見る格好でぽつんと農民が現れたり、時折教会が見える。教会の屋根は、丸いドームでその周囲に小さいドームが四つあり天辺はみな緑色をしていて、全体は食卓の薬味スタンドによく似ている。

昼食のために停車した駅で、一人の男がギターを弾いていた。ギターの一番先端にはパンパイプ[162]を固定して、その周りには鈴が複数付いている。これをみな、男は上手くあやつって拍子をとり、曲を弾いた。此所は我々が最初にロシアのスープЩI[163]（シュチーと発音する）を味わった所で、結構飲める[164]ものだ。ただ、なにか酸っぱいものが入っていて、それはロシア人の味覚には欠かせないものなのだろう。到着する前に旅の道連れにこちらが泊まるクレ・ホテルのロシア語の発音[165]を教えてもらった。おそらくロシア人の馭者を頼むことになると彼は考えていた。駅に着いてみ

るとその面倒はまったくなくなった。出迎えの男がホテル・ドゥ・ルシ[166]から来ていて、ドイツ語で話しかけてくれて我々をホテルの乗合馬車[167]に乗せると、荷物を受け取ってきてくれた。ディナーの後にはたいして出歩く時間はなかったが、実に目新しく驚くことばかりだ。通りはたいへんに広く（副次的道路ですら[168]ロンドンの大きな道路よりも広いと思われる）、歩いているところを疾駆する小さなドゥロシキは人を轢くことを何とも思っていないようである（じきに非常に気をつけていなければいけないことが分かった。すぐ近くに来ていても全く警告の声を上げないのだ）。店は飾りをつけた大きな看板を出し、教会は巨大で、青いドームに金の星をちりばめている。土地の人のわけの分からないお喋りには戸惑うばかり。いずれもみなサンクト・ペテルブルクを初めて歩いてみたときの驚きの数々である。途中で祠を見つけた。綺麗に飾って、内

159）読みは、ザシチシチャユシチフシャー。
160）キャロルはチェスのゲームが好きで、乗物の振動で倒れない工夫をしたチェス盤を作らせたものを鞄に入れて旅行中も持ち歩いた。
161）家族や友人とチェスをやってもキャロルはあまり負けることがなかったのであろう。読み手の笑いを誘うことを意図した記述から、この旅行日記が他の日記とは異なることがわかる。
162）Pan. 山羊の角、耳、足を持つ森林、牧人、家畜の神。ギリシャ神話に出てくる。音楽好きで笛を吹く。笛は少しづつ長さの異なる短い管数本を長さの順に並べてひと組としたもの。
163）実際のロシア語の綴りは、ЩИ。
164）drinkable．通常スープにはeatを用いている。
165）Gostinritsa Klee．ゴシチニツァ・クレ。
166）5日間滞在する。
167）Omnibus．最初に走ったのは19世紀の初めにパリで。この乗合馬車が町を走っていた時代は当然ながら馬力提供者の排泄物が路上に溢れて、婦人が馬車を降りて道路を渡るときは、路端で待ちかまえている小僧に小銭を渡すと箒で掃いて通る道を作ってくれた。
168）主要道路どころかペテルブルクでは二次的道路ですらロンドンの大通りとは比べ物にならず大きい、と驚いている。

も外も金メッキして中には十字架と絵などがあった。通りがかりの貧しい人々のほとんどみなが頭のかぶり物を取って、その祠に頭を下げ、幾度も胸に十字を切った。混雑した群集のなかでやっているのは奇妙な光景である。

7月28日（日）朝、大アイザック教会へ行ったが、礼拝はスラヴ語[169]で、私には理解することはとうてい無理だった。聖歌には楽器の伴奏はなかったが、人の声だけで見事な効果を出していた。教会の建物は四角で非常に大きく、そこから四つに等しく分かれ出て、内陣、身廊、そして2つの翼廊になっている。真ん中の天井は大きなドームで（ドームの外部は金メッキがしてある）、窓が非常に少ないために蝋燭の明かりがなかったら内部はほとんど真っ暗になっただろう。蝋燭は教会内部の壁にずらりと掛かっている聖画像の前にたくさん燃えていた。聖画像にはいずれも大きな蝋燭が二つづつ供えられて、傍にある沢山の蝋燭立てに、小さい蝋燭を供えることができる。聖画像の前に祈りにくる人々はひとりひとりが小さな蝋燭を1本づつ持ってきて、火をつけて立てて行く。会衆が礼拝をするのは、お辞儀をして胸に十字を切り[170]、それから時々跪いて額を床に付けるときである。これは個人個人の祈りをしながらやっているのだろうと思うだろうが、いつもそうとは限らない。非常に小さい子どもたちが同じようにしているのを見たが、表情のない顔からはやっていることに何か意味をこめているとは見えなかった。ひとり小さな男の子の場合には（その子を午後にカザン寺院[171]でも見たが）母親は跪づかせて額を床に付けさせていたが、まだとうてい三つにもなっていない幼い子であった。人々はみなお辞儀をして十字を切ることを聖画像の前でもやっていた。それどころか、外に出て（説教が始まった時に私は外に出て）リドゥンを待っていた間に気がついたのだが、多くの人は教会の入り口を通り過ぎる時に、たとえそれが非常に巾の広い道路の向こう側からでさえ、同じように十字を切っていた。細い歩道が教会の入り口から真直ぐに道路を横切ってついているので、

馬車に乗っている者も歩いている者もちょうど教会の入り口の向かいに来た時には、それと分かるようになっている。

ところで十字を切るというのもはっきりそうしているとは言い難い。というのは、その動作[172]は、右の人差指で[173]額、胸、右肩、そして左肩に触り、それから低くお辞儀をする、これをふつう3回やる。そして4回目は最後のお辞儀がない。

司式の司祭の服はとても立派で、行列と香の匂いからブリュッセルのローマカトリック教会を思い出した。しかしこうした豪華な礼拝を見れば見るほど、イギリスの教会は飾りの少ない、素朴な（それでいて私の胸にはいっそう本物の）礼拝であることが分かる。

それと知ったのが遅すぎたが、此処の英語の礼拝は午前だけなので、午後はこの驚きの都市をあちらこちらと歩いてみた。これまで見たことのある都市とはまるで違っているので、幾日でもただ歩き回って見るだけで他に何もしなくても満足できそうだ。リドゥンと一緒にネフスキー大通り[174]を端から端まで歩いた。長さはおよそ3マイル[175]あった。たくさんの立派な建物が道路沿いにずっと立ち並び、これは世界でもっとも見事な通りに入るのにちがいない。通りが終る所が（おそらく）世界で最大の四角い広場、アドミラルティ[176]広場ПЛОЩАДЬ[177]である。広場の長さはおよそ1マイル[178]あり、片側のほぼ全長が海軍省の正面になっている。

169）この土地のスラヴ人が話している言語の意味でスラヴ語と言っている。
170）誓い、祈りなどのときに額あるいは胸などの上で、また祝福のときに宙に十字の印をする。
171）カザン寺院は1801年にローマのサン・ピエトロ寺院を模して造られた。
172）ローマカトリックは、額、胸、左肩、右肩の順序。
173）昔ロシア教会では二本の指でおこなっていた。ニコンが総主教となってギリシャ正教のやり方に戻して3本の指で行うこととしていた。
174）The Nevski. The Nevski Prospect と呼ばれる非常に大きい道路。
175）約5キロ。
176）海軍本部あるいは海軍省の意味。
177）プローシチャチ。ロシア語で「広場」の意味。
178）約1.6キロ。

ピョートル大帝の乗馬姿の像[179]が海軍省の近くにある。像の下は台座ではなく岩盤[180]のままで、馬は後足で立ち、蛇が一匹その両足に巻き付いている。その蛇を馬は踏み付けているのだと思う。もしこれがベルリンに建てられていたらピョートル大帝は疑いもなく怪物を殺しにかかっているところだ。しかし此処ではそんなものには見向きもしない。ここでは動物殺戮主義[181]は見かけない。巨大なライオンの像が二つあった。痛々しいほどに穏やかで、それぞれ大きな玉をころがす姿はまるで子猫のようである。

テーブルドットでおいしいディナーをとった。始めはШЩ[182]が出た。この料理本来の味は心配したほど酢っぱいものではないことがわかって、安心した。

7月29日（月）今日は先ずペテルブルクの地図、それから小さな辞書と単語集を買った。後者は必ず役に立つにちがいない。昼間は（訪問先を回りそのほとんどが不在だった）ドゥロシキを四回使った。そのうち二回はホテルから呼んだので玄関のポーターが馭者と交渉をしてくれたが、あとの二回はこちらが交渉をしなければならなかった。参考までに初歩的会話の見本を挙げておこう。

私　　ゴシチニツァ・クレ[183]（クレ・ホテル）。

馭者　（早口で話すことばから分かった単語は）トゥリ　グロッシェン[184]。（3グロッシェン、つまり30コペクス[185]）。

私　　ドゥヴァチャッチ[186]　コペイキ[187]？　（20コペクス[188]？）

馭者　（腹を立てて）トゥリチャッチ[189]！（30!）。

私　　（断固と）ドゥヴァチャッチ[190]。

馭者　（宥める調子で）ドゥヴァチャッチ　ピャーチ[191]？（25？）。

私　　（言うべきことは言ったという風に、そしてもうこの話は止めにしようと）ドゥヴァチャッチ。（ここで私はリドゥンの腕をとり、一緒に歩き出す、馭者の叫ぶ声など無視して。数メートル歩いたとこ

ろで、ドゥロシキが後ろからだらだらとついてくるのが聞こえた。駅者は横に並びながら、声を掛けてくる。）

私　（難しい顔で）ドゥヴァチャッチ?

駅者　（嬉しそうに笑顔になって）ダー！ダー！[192]、ドゥヴァチャッチ！（ここでわれわれは乗り込む）。

こうしたやりとりは一度だけならある意味でおもしろいけれども、ロンドンで辻馬車を雇う度にこうなるといささか煩わしくなってしまう[193]。

ディナーのあとは市（いち）に行ってみた。大きな街区に建物が並び、それを囲んで小さな店が柱廊の下にある。40か50店が続いていて、手袋、替え襟などを商っている。ここでは何十軒という店が聖画像だけを売っていた。

179）ピョートル1世の即位100年記念として1782年に除幕。エカテリーナ2世がフランスから彫刻家ファルコネを招いて制作させた高さ12メートルの青銅の騎士像。制作に10年以上かかったという。

180）この台座のために、フィンランドから重量300万トンの巨大な花崗岩を運ばせたという。

181）ベルリンの町の彫刻についての感想は7月20日を参照。

182）実際のロシア語の綴りは、ЩИシュチー。

183）Gostinritsa Klee クレ・ホテル。キャロルはGostsnitsa Kleeと綴っている。

184）Tri groshen.

185）30コペクスは、現在の日本円にして326.25円。

186）Dvatzat.

187）Kopecks. この貨幣単位はロシア語で、単数がコペイカ、複数はコペイキ、この場合はコペイヤクという。

188）20コペクスは、現在の200円ほど。

189）Tritzat.

190）Dvatzat.

191）Dvatzat pait.これはキャロルの綴り字で、ロシア語はpiat。

192）Da! Da! へいへい。

193）当時の通貨は、

1ルーブル銀貨＝100カペイキー＝3シリング1ペニー。1ルーブル紙幣＝2シリング5ペンス。1英ポンド＝約8.27ルーブル紙幣＝約6.49ルーブル銀貨。1英ポンド（1867年当時）は46.06ポンド（2004年の換算で）。1867年当時の1ポンドは現在の約9000円（俸給と不動産については算定基準に含まない）。当時の1シリングは約450円。当時の1ルーブル紙幣は現在の1087.5円。当時の1ルーブル銀貨は1387.5円。

小さい不器用な1インチか2インチ[194]程度の絵から、1フィート[195]かそれ以上の大きさで精巧なものまであって、顔と手以外はすべて金である。買おうとしてもなかなか簡単ではないだろう、この辺りの商店主はロシア語しか話さないと聞いていたから。

7月30日（火）ずいぶんたくさん歩いた。おそらく15, 6マイル[196]は歩いたと思う。ここの距離というのはたいへんなものだ。まるで巨人の都市を歩き回っているみたいだ。要塞[197]の中にある大聖堂教会[198]へ行った。金と宝石、それに大理石を使った壮大な造りである。美しい、というよりも豪勢というのが当てはまる。案内人はロシアの兵士で（大概の公務は兵士がやっているようだ）彼の解説は母国語なので、なんら説明の役には立たない。ピョートル大帝以後の皇帝の墓[199]は（一つだけを例外[200]として）みな此処にある。墓はみなまったく同じ白い大理石造りで、角にはみな金の飾りがついて、最上部に大きい金の十字架が寝せてある。また、金の銘版の上にことばがきざんである。その他の飾りはない。

教会内部の周りには聖画像が掛かっていた。その前には蝋燭が燃えて、賽銭を受ける箱がおいてある。一人の貧しい女が聖ペテロの絵のところへ行くのを私は見ていた。病気の赤ん坊を腕に抱えて、女は先ず硬貨を1枚、番をしている兵士に渡した。兵士はそれを女のために箱に入れてやった。女はそれから長いことお辞儀をしたり、十字を切ったりを繰り返し、その間中哀れな幼児に向かってあやすように声をかけていた。やつれて憔悴した女の顔からは、今自分がしていることが聖ペテロの気持を宥めて子どもを救ってもらえるものと信じている様子が読み取れた。

要塞からヴァシーリ・オストロフ[201]（ヴァジル島）に渡り、そこをずいぶんと歩いた。店の名前などはここではもうすっかりロシア語である。その結果、パンと水を通りがかりの小さな店で求めるために、私は二つの単語を語彙集の中から探し出した。フレーブ[202]とヴァダー[203]で、取引にはこれで充分であった。

夜、ホテルの部屋に戻ってから朝のための水もタオルもないことが分かった。それに輪を掛けて見事なことに、呼び鈴（に応えてドイツ人の下僕がくるはずであった）が鳴らない。このめでたい非常事態に遭遇し、自分で下へ降りて行かざるをえなくなった。下僕は見つかった。幸い私の階の担当であった。その男に私は期待をこめてドイツ語のつもりのことばで話しかけた。ところが、全然通じない。相手はただ、頭を強く横に振っただけ。仕方なく（急遽、語彙集を引いて）こちらの頼みをロシア語で告げた。そのロシア語というのが極端に単純化した語形で、そして基本語以外はすべて省略した。

7月31日（水）旅の連れであったアレグザンダー・ミュア氏が訪ねてきた。明日ペテロゴフ[204]へ来て（彼のところの従業員の案内で）見物をして、それから一緒に自分と食事をするように、と招待してくれた。今日はエルミタージュ[205]美術館（冬宮にある絵画などの収集）と、アレクサンド

194）1インチは2.54センチ。
195）1 foot. 足の歩幅に由来する長さの単位。30.48センチ。
196）およそ24キロから26キロ。
197）ピョートル大帝がスウェーデン軍からロシアを守るために建設したペトロパブロフスク要塞。ネバ川河口の小さな島にあり、厚い壁に囲まれている。
198）要塞の中央にあるペトロパブロフスク寺院。
199）ロマノフ王朝のピョートル1世（在位1682-1725）からアレグザンドル3世（在位1881-1894）まで約200年間の皇帝、皇妃が葬られている。
200）ピョートル2世が例外。
201）Wassili Ostorov. ヴァシーリエフスキィ島。オストロフは島という意味。
202）khlaib.
203）vadah.
204）ペテルゴフ、Peterghof. キャロルは-g- を入れずにPeterhof と書いている。1944年までの旧称、現在のペトロドヴォレツ。サンクトペテルブルクの西、フィンランド湾の南岸にある市。大宮殿がある。
205）Hermitage には隠者の隠れ家の意味がある。女帝エカテリーナ2世の私的な楽しみの蒐集から始まった。現在では世界で有数の美術館。

ル・ネフスキー[206] 修道院[207] を見学にいった。

エルミタージュ美術館では、もともと絵画に絞ってじっくりと見るつもりでいたのだが、案内人の手にかかって彫刻その他がある室へ連れていかれた。絵画展示室の方へ上がっていきたいというこちらの意向はまったく無視して、自分の担当する部門にどうしてもと連れて行くと、そこで謝礼をとった。とはいえ、見事な古代美術の収集品で、計り知れない価を払って集められたものである。

絵画については一部を急いで見ただけだったが、彫刻と同様に極めて貴重な収集品があった。大きな展示の一室は、ほとんどムリリョ[208] だけを集めていて、非常に美しい「聖母の被昇天[209]」という絵と、「ヤコブの夢[210]」という絵があった（問、ドイリ・アンド・マート[211] のところで彫ったものか？）。他にティシアン[212] だけをたくさん集めた室があった。これらの絵画全部、いや半分も見る時間がないまま、オランダ派の絵画[213] があるところへポール・ポター[214] の大作というのを見にいった。この絵についてはマレー[215] が、「たいへんな技巧とユーモアをもって描いてある、分割した部分部分に猟の獣、ライオン、猪などのいろいろな狩りの場面を描いて、最後には動物が全部一緒になって、狩人と猟犬を裁判にかけ処刑する」、と解説していた。

よく覚えているのはラファエル[216] の描いた円形の「聖家族[217]」で、このうえもなく素晴らしい絵である。

冬宮殿から修道院までドゥロシキでいった。ここでは教会が見られただけだった。教会のなかには数々の祠があり金、銀、宝石で贅を尽くして飾られていた。夕拝まで残っていたが、礼拝はだいたいアイザック教会[218] の場合と同じで、ただここは参列者がひじょうに少なかった。

206）ノブゴロド公アレグザンドル・ネフスキーは13世紀のロシアの英雄。死後、ロシア正教で聖者に叙された。ペテルブルクにはその名前をつけた大通り、修道院がある。

207）ここの墓地には、ドストエフスキー、チャイコフスキー、ムソルグスキー、ゴーゴリーら著名な芸術家の墓がある。
208）宗教画、肖像画で有名な17世紀のスペインの画家。英国のレノルズやコンスタブルに影響を与えたと言われる。
209）白い衣をつけた少女のようなマリアが目を天に向けて金色の雲のなかに立ち、幼い天使が多数彼女を押し上げているように周囲に描かれている。
210）旧約聖書の話で、石を枕に寝ている旅人のヤコブが夢を見ている。夢に現れた木の梯子がヤコブの傍に立ち、その梯子を数人の少女のような姿の天使が上っていくところを描いた。
211）D'Oyly & Mart. ドイリーは、イギリスで絵画のリトグラフ、エッチングを作成した人としてダニエルズと共にドイリの名前が挙げられている。in D'Oyly & Mart で、共同経営の店名か。
212）ティツィアーノ。イタリアのヴェネツィア派の画家 （1490-1576）.
213）17世紀1600-1670 にオランダがスペインの支配から独立した時代の画風。風景画や庶民の生活を描いた。
214）Paul Potter（1625 - 54）. 風景画、動物画を描いた。
215）John Murray の *Handbook for Travellers in Russia, Poland, and Finland*. 1865年版には、次のような説明がある。Paul Potter.- 1052 the Hunter's Life. this will be found one of the most amusing pictures in the gallery: in 12 compartments it represents different sporting subjects, and in 2 others the ultimate revenge of the animals on the cruelty of man: --以下、12の場面の主題が続いて、次に裁判の場面について、マレーは次のように書いている。 The upper center Compartment shows the huntercaught and brought to judgment before the lion, who presides, surrounded by his counselors; the fox acting as clerk. The bear performs the office of head constable, and a wolf on each side of the huntsman keep him in safe custody. A bear and a boar are bringing up two braces of hounds, the accomplices of man, while the stag stands proudly waiting to give evidence. The sentence of death is carried out in the lower division, where the hunter is being roasted over a fire and basted by a boar and a goat, while 2 bears turn the spit. A monkey and an elephant are bringing up faggots; the wolf and the fox meanwhile hanging two of the accomplices. A monkey on the top of the gallows acts as assistant executioner. The joy of the animals at their deliverance is wonderfully portrayed; the goat is cutting capers, and the wolf rolling on the ground with laughter and delight.エルミタージュ美術館にはポール・ポターの作品が全部で9点ある、と書いてある。
216）Raphaello Santi （11483-1520）. イタリアルネサンスの画家。
217）エルミタージュ美術館にあるラファエルの「聖家族」は、「処女マリアと髭のないヨセフ」ともいい、円形ではない。キャロルはラファエルの別の絵の円形の「聖母子」のことを言っているのではないか。
218）7月28日の日曜日に行ったスラヴ語で礼拝をしている大きな教会。

8月1日（木）10時半頃にメリリーズ氏が迎えにきて、実に驚くばかりの親切で今日一日を我々のために割いてペテロゴフ、距離にして20マイル[219]ほどのところへ連れて行き、そこを案内して回ってくれた。蒸気船で、潮の干満のない、塩分のないフィンランド湾を下って行った。干満がないというのはバルト海全体に通じる特徴で、塩分がないというのはバルト海の大半について言える特徴である。湾を渡ったところは、対岸までおよそ15マイル[220]ほどで非常に浅く、水深わずか6から8フィート[221]の所が多く、冬は毎年すっかり凍りついて2フィート[222]の厚さの氷ができる。それに雪が積もると一面の雪原となり、往来するのに使われている。しかし、遠いので食料を持たなかったり、悪天候からの避難所が途中にはないために充分に防寒をしていなかったりすると、徒歩で渡るのには大きな危険が伴う。メリリーズ氏が知人から聞いたという話によると、去年の冬、そこを通った時には途中で凍え死んでいる8遺体を実際に見たという。船からはフィンランドの沿岸とクロシタット[223]とがよく見えた。ペテロゴフの港に着くと、ミュア氏の馬車が待っていた。ところどころ馬車の通れないところは下りて歩きながら、宮殿を二つ見た。そこの庭園の中には小さな四阿（あずまや）がいくつもあって、一つ一つが小さいながら立派な住まいになるほどで、内装といい調度といい、趣味のよい、富が成しうる限りの造りであった。変化のある美しさ、また自然と人工の見事な調和という点で、ここの庭園はサンスーシの庭園を顔色なからしめるものと思う。庭の隅という隅、また小道のはずれには、具合よく彫像の置ける場所があれば必ず何か一つは置いてある。ブロンズ製であったり、白い大理石製であったりする。大理石の場合は大抵背後に円形の壁龕がついていて、青い色の背景に像が浮かび上がるようになっている。こちらには石でできた岩棚が連続して、その上を水が幕のようになって滑り落ちる。またこちらには小道が長く続き斜面を下って行く段々がついている。その道を行けば頭上には蔓性の植物がアーチをなしている。こちらには顔を出した巨大な岩を斧で刻んで作った大きな頭と顔と穏やかなスフィンクスのような目を持った岩塊がある。

それはまるで巨人の神が地中に埋もれた自分を解放しようともがいているような姿に見える。こちらには、噴水が円を描くように仕立てたパイプから水を吹き上げて、内側の円は外側よりも高く吹き上がるように作ってあるために、きらめく飛沫のピラミッドになっている。こちらには、下の方の森の切れ目を通して見える芝生に、真っ赤なジェラニュームの花が細い筋になって続いている。遠目には、それが大きな珊瑚の枝のように見える。そこかしこには、木々の並木があらゆる方角に長く延びて、時には3、4本が一緒に並び、ときには、星のように放射状になって見える。いずれもはるか遠くまで続いていき、それをどこまでも目で追っていくとやがて見えなくなってしまう。

ここに書いたことは、見たものを後になって思い出すためのもので、何か意味があってということではない。

昼食に行く途中にちょっと家に寄って、ミュア夫人と可愛い子供たちに会った。五時頃にまたそこへ行って、ミュア氏に会った。他にミュア氏の友人がディナーに来た。終わってからペテルブルクへ労を厭わぬメリリーズ氏と共に帰った。彼は今日一日の親切の仕上げに、ドゥロシキを雇って馭者とのあの不可欠の駆引きをやってくれた。もしも暗闇のなかで馭者どうしが争って客引きをやる不可解なことばの騒音、混沌とした言語のただ中で、我々二人が賃料の交渉をすることになったとしたら、それは絶望的な離れ業というものだろう。

3．前半のおわりに

219）約32キロ。
220）約25キロ。
221）1.8から2.4メートル。
222）約61センチ。
223）フィンランド湾内コトリン島にある軍港都市。ピョートル大帝の命によりペテルブルク防衛のための海上要塞として建設された。

ここまでのルイス・キャロルのロシア旅行日記は、目的地ロシアへ向かう道中とその間に立ち寄った都市の見学先や見聞したこと、および折々の感想を記録しています。ここまでの旅行の経路と滞在期間は次のようになっていました。

ブリュッセル（2泊）―　ケルン（1泊）―　ベルリン（6泊）―
ケーニッヒベルク（3泊）―（28時間30分）―ペテルブルク（5泊）

この先は、翌日8月2日にペテルブルクからいよいよ目的地モスクワへ向かいます。

旅行に欠かせないのが時刻表と旅行案内でした。トマス・クックの時刻表*Cook's Continental Time Tables*の初版は1873年3月で、まだ出版されていませんから、ロシア旅行でキャロルが利用したのは、ジョージ・ブラッドショー（1801-53）が発行した*The Continental Railway Guide*でした。ブラッドショーが*Bradshaw's Time-tables*を初めて出版したのは1839年で、キャロルが7才のときです。キャロルは11才で移り住んだクロフト牧師館の広い庭に線路を描き、鉄道ごっこのルールを作って遊びました。また家庭用人形劇のためにブラッドショーの「鉄道案内」を題材にして子どものキャロルはバラッド・オペラ*La Guida di Bragia*というスキットを書きました。このMSはアメリカのニューヨーク大学図書館にあるビロル・コレクションに所蔵されています。鉄道と時刻表は早くから興味の対象になっていました。

島国のイギリスを出て、大陸をヨーロッパからロシアへ向かい、その入口にあたる都、サンクト・ペテルブルクでは町の規模の大きさ広さに驚きました。ピョートル大帝を記念する石像と土台の岩石の巨大さ、ネフスキー大通り、海軍省、いずれも想像を絶するスケールだったようです。この先、モスクワについてからも、数々の驚異が待っています。ルイス・キャロルのロシア旅行日記後半は、1867年8月2日から9月13日です。

謝辞

ルイス・キャロルのロシア旅行日記の翻訳にあたり、細井勉先生から多くのご教示と励ましをいただきました。ここに記して感謝致します。

使用テクスト

Tour 1867 マイクロフィルム（プリンストン大学図書館）

参照文献

The Russian Journal - II, A Record kept by Henry Parry Liddon of a Tour taken with C. L. Dodgson in the Summer of 1867, Morton N. Cohen ed., The Lewis Carroll Society.

The Russian Journal, John Francis McDermott, E. P. Dutton, 1935.

Lewis Carroll Tagebuch einer Reise nach Ruchland im Jahr 1867.

Lewis Carroll's Diaries vol. 1 - 7, Edward Wakeling ed. 1999.

The Life and Letters of Lewis Carroll, Stuart Dodgson Collingwood, 1899.

Life and Letters of Henry Parry Liddon by John Octavius Johnston, 1904.

The Princeton University Library Chronicle, Parrish Collection II, 1956.

The Letters of Lewis Carroll, 2 vols. , Morton Cohen ed. 1979.

Lewis Carroll As I Knew Him, Isa Bowman, 1979, Dover Publications.

Lewis Carroll Handbook, Williams & Madan & Green, revised by Denis Crutch, 1979, Dawson.

Handbook for Travellers in Russia, Poland, and Finland. John Murray, 1865.

Carte Routiere de la Russie Centrale, John Murray, London, 1865.

'The Visit of the Belgians', *The Times*, July 13, 1867.

Bradshaw's Continental Railways Guide, July 1867.

Bradshaw's Map of Europe, 1867.

The Works of Lewis Carroll, Spring Books, 1965, Paul Hamlyn Ltd.

Thomas Cook European Timetable, 2004.

Paris Universal Exhibition, 1867, Complete Official Catalogue, J. M. Johnson and sons, London and Paris. 1867.

Paris and Its Environs, Handbook for Travellers, K. Baedekker, 1878.

I See All: The world's First Picture Encyclopedia, 5vols., Arthur Mee ed.(初版には出版年の表記がない)。

The Encyclopaedia of Oxford, Christopher Hibbert ed.,1988, Macmillan.

London Encyclopaedia, 1983. MacMillan.

A Social History of Tea, Jane Pettigrew, The National Trust, 2001.

Language, David Christal, Cambridge, 1987.

『世界地図風俗体系XI』仲真摩照久、昭和6年、新光社。

『西洋美術解読事典』ジェイムズ・ホール1988年、河出書房新社。

『キリスト教シンボル事典』ジェニファー・スピークス、1987年、大修館書店。
『キリスト教美術図典』、柳　宗玄・中森義宗編、1990年, 吉川弘文館。